

ISSN 0910-2396

# 野鳥たより

—北海道—

第 68 号

編集・発行 北海道野鳥愛護会

発行年月日 昭和62年 6 月21日



ツクシガモ 1986. 7. 14 当別町石狩川 撮影者 福岡 研也

# 野幌の花から

大坊 幸七

ムラサキという名の植物については、実際に見たことがなくても名前については知っている方が大勢おられるのではないと思う。ムラサキ科の植物で、おもしろいことにはこの科の花の付きかたの多くは、サソリ状であることで知られている。サソリの尾に見立てたもので、花は下から順に咲きながら巻をほどこいていく。

このような花序（花の付きかた）を巻散花序という。

ムラサキ科を代表するこのムラサキは、日本に昔からあった花で万葉集にも詠まれている。

額田王と天武天皇とのあいだに贈答された、

## ◆あかねさす紫野行き標野行き

野守は見ずや君が袖振る（巻1の20）

## ◆紫草のにはへる妹を憎くあらば人妻ゆえに

われ恋ひめやも（巻1の21）

わたくしは、想像するのである。今から1320年前の5月、朝からよく晴れ上がった日であった。近江蒲生野の野はムラサキの花が一杯咲きほこっていた。折しもこの日は、宮中あげての薬草狩りで、先程まで高殿のまわりで、さんざめいていた宮人たちは今は方々に散っていった。遠くから額田王をお認めになった天武天皇がしきりに袖をお振りになるのである。それにお気づきになった王は「お懐かしうございます。お手を振ってくださるのは、とても嬉しうございますが野守りの者たちが見てるではありませんか」と。

すると皇子は「紫草の花のように美しいあなたは、いま人妻であるが恋しさがまがんでできなくなって袖をふったのだ」と。

…謎多き額田王…それ故にわたくしは古代の女性の哀しさ、別れたお二人の事情など、多くの空想を与えてくれるのである。

そうして、その空想の中には必ずムラサキの花がある。歌の意はざあっとこんな具合である。

この歌に出てくる「紫野」や「紫草」は現代の「ムラサキ」をいうのであり、昔は普通に見られた花なのである。

今はどうかというと、残念ながら全国的な珍奇植物の一つになっているようである。

なければ、なおさら見たい思いがする。こんな話を覚えていてくれたのであろう。薬科大学を出られた親切なF子さんが、「薬草にするのですが、ムラサキの根です。あげます」と言って、わたくしに見せてくれた。

この干せた根がムラサキか…薬用ともなり古代の染料ともなった…わたくしは、感銘をもってしみじみ眺めたものである。だが、花の姿はやはり図鑑にたよる外はなかった。

ある年の7月、通い馴れた野幌森林公園の大沢園地で“おにぎり”の昼食をすませ、桂コースに歩を進めた。

右側の溝の草むらにふと目をやったとき、“おやっ”とおもった。さらに近寄って草むらをよくよく覗いてみると、小さな五弁花は巻散花序ではないか。勿論コンフリーでもオニルリソウでもない。胸が少々高鳴ってくるのが自分でもわかった。

とにかく、ムラサキ科に間違いのないことは確かである。それならば、なんの花であろうか。もしや“ムラサキ”？だんだん落ち着きを取り戻したとき、ムラサキの花は白色であったことを思い出した。

この花をよくみると、小さな花弁はブルーである。

これがムラサキでないとすれば、ワスレナグサかエゾムラサキである。どうやらエゾムラサキではないかと思いはじめてきた。花は淡青紫色で花径は6～7ミリぐらいである。まだ下方の花が一輪咲いたばかりである。

可憐さは、色こそ違え遠い万葉の花、ムラサキのロマンを偲ぶのに十分である。わたくしは、長い時間みとれていた。

その後、この花のあったところを毎年通るたびに見るのであるが、わたくしの見果てぬ夢を代行してくれた「えぞ」のムラサキは再び見ることはなかった。

よく考えてみると、ムラサキが珍奇な植物であればこ

そ、わたくしの古代へのロマンは、いつまでも心に描くことができるのではあるまいか、と思うのである。



むらさき *Lithospermum erythrorhizon* Sieb. et Zucc. [むらさき科]  
(新改定学生版 牧野日本植物図鑑)

〒062 札幌市豊平区西岡2条5丁目8-8

### 1. はじめに

ポロト湖は、苫小牧市から約21km室蘭よりの白老町にあります。昭和58年ウトナイ湖で行われた第29回日本野鳥の会全国大会で、北大苫小牧地方演習林と共にエクスカージョンの場となったところでもあります。室蘭、苫小牧、札幌地方のバードウォッチャーにはよく知られている探鳥地です。

苫小牧から近いということもあり、昭和53年の秋から現在（昭和62年3月）まで不定期ですが年間を通して観察してきました。本紙ではポロト湖の鳥はまだ載っていないようですので、とりあえずリストだけでも、と思いつき報告します。

フィールドノートをもとにリストを作りましたが、観察もれや記入もれも多々あると思いますので、リスト以外の鳥についてご教示いただければ幸いです。なお、カモメについては一部、ウトナイ湖サンクチュアリの安西チーフレンジャーから記録をお借りしました。紙上をかりてお礼申し上げます。

### 2. 地域の環境

ポロトとはアイヌ語で「大きな沼」という意味ですが、面積は32ヘクタールでウトナイ湖の約9分の1の大きさです。一周約4kmの南北に長い湖で、周囲は標高60～100mの小高い林の丘陵地になっています。

湖の周囲の森林は約70%が、ミズナラ、エゾイタヤ、エゾヤマザクラ、ハルニレ、ハリギリ、ヤチダモ、クリなど約40種からなる広葉樹の天然林です。その中にトドマツ、エゾマツ、カラマツなどの小規模な人口林があります。

林床植物としては、ミヤコザサを主に、オンダ、オニシモツケ、シラオイエンレイソウ、ムラサキシキブ、オオイタドリ、フッキソウなどがあり、湿地にはミズバショウやゼンソウも見られます。

湖には、ワカサギ、コイ、フナなどがおり釣り場として、また冬はスケート場として使われています。

湖とその周囲約420ヘクタールは昭和51年「ポロト自然休養林」に指定されており、また鳥獣保護区でもあります。湖と湿地を一周する約5.5kmの遊歩道・自転車道がありますが、昭和57年湖の北に細長く伸びる湿地を東西に横断する形で、道央自動車道が建設されました。地上に橋脚などの建設物はありますが、ちょうどミズバ

ショウの群落を見るのに都合の良い植物観察用浮橋のすぐ近くに造られたので、自然景観が著しく損われ、また騒音や排気ガスにより、静寂で清浄な環境が次第に失われつつあります。この道路建設により、自然休養林としての価値は半減したのではないかと考えられます。

なお、湖畔にはアイヌ文化を紹介した民族資料館や復元されたコタンなどがあり、道内外から多くの観光客が訪れます。

### 3. 鳥相の概要

湖と湿原を一周する遊歩道を歩きながら観察したものをリストアップしました(表)34科113種が記録されましたが、おおざっぱに分けますと、山野の鳥は76種で、67.3%、水鳥は37種で32.7%となります。

これらの鳥の中で、これといって特筆すべきものはありませんが、春の探鳥会の目玉はなんといってもアカショウビンです。5月～6月はかならずと言っていいほど姿を見たり、声を聞くことが出来ます。また冬期は、カラ類やケラ類に出会う頻度が高く、しかも近距離で観察することが出来ます。

比較的希なものとしては、ハシジロアビ、オオハム、カンムリカイツブリ、アマサギ、ジュウイチ、クマガラ、カヤクグリ、オジロビタキ、オオマシコなどがあげられます。オジロビタキは昭和60年5月28日に観察されました(オス、写真有り)。北海道では初記録ではないかと思えます。なお同年10月29日には北大苫小牧地方演習林でも観察されています。

水鳥の中で、ガンカモ科は14種記録されています。湖が小さくかなり正確なカウントが出来るので、53年から56年まで、数が多くなる10月から結氷する12月下旬まで月2～3回カウントしてみました。その結果比較的多いのは、マガモ、コガモ、キンクロハジロ、カワアイサなどで、最多カウント数はマガモ200、コガモ60、キンクロハジロ156、カワアイサ80となっています。海が近いので、海がシケた時は飛来数が増えます。

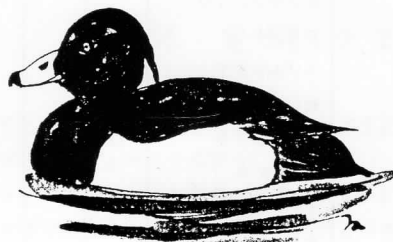
ポロト湖の鳥についての資料としては、北方鳥類研究所(日本道路公団札幌建設局)の「ポロト自然休養林における野生鳥獣類の生態および植生に関する調査(1970)」があります。この調査は休養林内を通る道央自動車道建設工事に先立って行われたものです。この調査では27科86種が記載されていますが、私のリストにないものとし



科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ホトトギス	ジュウイチ						○						
	カッコウ					○	○	○					
	ツツドリ					○	○	○					
フクロウ	アオバズク						○						
	フクロウ						○						
ヨタカ	ヨタカ						○						
アマツバメ	アマツバメ					○							
カワセミ	ヤマセミ				○	○	○				○	○	○
	アカショウビン					○	○	○					
	カワセミ						○						
キツツキ	アリスイ					○							
	ヤマゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	クマゲラ												○
	アカゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	オオアカゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ユゲラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ヒバリ	ヒバリ				○	○							
ツバメ	ツバメ				○	○							
	イワツバメ					○							
セキレイ	ハクセキレイ				○	○	○						
	セグロセキレイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ビンズイ					○	○						
ヒヨドリ	ヒヨドリ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
モズ	モズ					○	○	○	○	○		○	
カワガラス	カワガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
ミソサザイ	ミソサザイ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
イワヒバリ	カヤクグリ											○	
ヒタキ	コルリ					○	○						
	ルリビタキ											○	○
	トラツグミ				○	○	○	○	○				○
	クロツグミ				○	○	○	○	○	○	○		
	アカハラ				○	○	○	○	○	○	○		
	シロハラ			○	○								
	マミチャジナイ										○		
	ツグミ	○	○	○							○	○	○
	ヤブサメ					○	○	○					
	ウグイス					○	○	○	○	○	○		
	エゾセンニュウ						○						
	コヨシキリ					○							
	エゾムシクイ					○	○	○					
	センダイムシクイ					○	○	○					
	キクイタダキ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	キビタキ				○	○	○						
	オジロビタキ					○	○						
オオルリ					○	○	○						

科名	種名	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
ヒタキ	コサメビタキ					○							
エナガ	エナガ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
シジュウカラ	ハシブトガラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ヒガラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ヤマガラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	シジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ゴジュウカラ	ゴジュウカラ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	
キバシリ	キバシリ	○	○			○					○	○	
メジロ	メジロ					○			○		○		
ホオジロ	ホオジロ	○				○	○	○	○	○	○	○	○
	カシラダカ										○	○	○
	ミヤマホオジロ	○	○										
	アオジ				○	○	○	○	○	○	○	○	
	クロジ										○		
アトリ	アトリ	○											
	カワラヒワ				○	○					○		
	マヒワ	○											
	オオマシコ												○
	ベニマシコ		○		○						○	○	
	ウソ	○			○							○	○
イカル						○				○			
シメ	○					○				○	○	○	
ハタオリドリ	ニュウナイスズメ					○	○						
	スズメ	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
ムクドリ	コムクドリ					○	○						
	ムクドリ				○	○	○	○			○		
カラス	カケス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハシボソガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○
	ハシブトガラス	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	○

〒053 苫小牧市青葉町1丁目 苫小牧西高校内



# 長生きできる鳥

渡辺 紀久雄

私は、札幌市白石区川下の草原で、野鳥を観察している。昨年（1986年）も私が観察するオオジュリンの雄「グリコ」は、川下の草原にやって来た。

グリコは、まず1982年9月に島田明英氏に標識調査により捕獲され、足に環境庁のアルミ製リングが付けられた。そしてその翌年5月に私が再捕獲し、両足にグリーンリングを付け、「グリコ」と名前を付けた個体である。当時は、あのグリコ・森永事件の発端となった誘拐事件がまだ世間を騒がせていた頃で、グリーンリングとお菓子のグリコをひっかけたような名前をつけたのだ。 (ちなみに、グリコの奥さんは「おまけ」と名づけた。)

グリコは、私が観察してから昨年で4年目、島田氏が捕獲したとき成鳥であったことを考えると、少なくとも1981年以前に生まれた個体であるから、年齢はもう満5才以上になっている。

私たちがウォッチングしている野鳥たちは、いったいどれ位生きることができるのだろうか。これを知るのには、簡単なことではないが、ある程度の推定する材料はある。

ひとつは、このオオジュリン「グリコ」のように、カラーリングなどの標識がある個体の継続観察例である。ほかにも継続観察した例が結構あると思う。また、リングなしでも、身体的特徴が個体識別の目印となって観察された例もあることだろう。

また、継続観察以外のものとしては、標識調査の回収例もこのために役立つものである。「標識調査」とは、山階鳥類研究所が環境庁の委託を受けて行っている、鳥の渡りのコースなどを調べるための調査で、「回収」とは、一度捕獲してリングを付けられた鳥が、その後同じ場所で、あるいは遠く離れた所で、再び捕獲されたり死亡などの原因で発見されることである。

この調査による報告書(注1.)では、回収例のうち、標識放鳥後5年以上経過したものを、「長期経過後の回収例」として紹介している。これによると、大型の鳥(カモ・カモメ類など)は、10年を越す回収例も

比較あるが、小鳥類では最長でも5～9年程度である。比較的回収数の多いオオジュリンについてみると、最長のもは9年1ヶ月という例がある。この個体は、生きたまま再放鳥されたので、その後の分も含めれば10年位は生きたものと考えられる。

標識調査では、最初捕獲したとき既に成鳥であった場合には、それまでの年数が不明であり、生きたまま再放鳥した場合には、その後の年数が不明であるのが残念である。

しかし、過去の回収数がたとえばオオジュリンでは、過去6年間(昭和55～60年)の調査報告を調べてみると、同一場所かつ同一シーズン内での回収を除いて、回収数は711例あるうち、5年以上経過した回収例がわずか13例しかないこと( $13/711 \times 100\% \approx 1.8\%$ )を考えると、小鳥類では5年以上生きることは稀であると思われる。10年以上生きるのは至難なのではないかと思われる。

ところで、読者の方の中には、「いや、うちで飼っていたカナリヤは、10年以上も生きたぞ。」とおっしゃる方もいるかもしれないが、飼鳥については、生きている環境が全く違うので、野に生きる鳥とは比較にならない。

そこで次に、野鳥にとって長く生きることの困難さについて述べてみる。

野鳥は、餌を毎日自分でみつけて採ることはもちろん



1986. 6. 8 オオジュリン ♂ (グリコ)

雨や台風、冬の寒さに耐えなければならない。寄生虫やいろいろな病気にもかかりやすいし、ワシ・タカなどの天敵からも身を守らねばならない。繁殖期においては、テリトリー争いや育雛に体力と神経をすり減らす。また、半年ごとに何千キロも渡りをする際の体力の消耗は、大変なものである。

このように、厳しい環境の中で、「長く生きる」ことは大変なことなのであり、何年も生き残れる個体は、ほんのごく一部なのであろう。

私が昨年(1986年)秋期の標識調査で捕獲した中で、最も羽数の多かった種はアオジで、281羽捕獲したが、このうち成鳥(2年目以降の鳥)の数は33羽、11.7%であった。この数字は、何を示すだろうか。幼鳥(1年目の鳥)が2年目まで生き延びることの困難さが示されていると思う。厳密には、捕獲した鳥の成鳥の比がそのまま生きているアオジの成鳥の比を表わすとは限らない(幼鳥の方が捕まりやすいかもしれない)し、結論づけるほどの捕獲数の多さではないかもしれない。しかし、野鳥が生きていくことの難しさを示すひとつの例示であらうと思う。

生まれてから1年間を無事に過ごすことのできる個体の割合は、このように低いのであるが、これを卵の段階から考えてみると、その割合は一層低くなる。卵が産み込まれて、それが捕食されたり、親から放棄されたりすることなく孵化し、孵化した雛がこれまた捕食されたりすることなく無事に巣立ちをする。そして、初めての渡りを経験しながら冬を越し、翌春テリトリーと結婚相手を得て繁殖する。ここまでいく割合は、小鳥類ではせいぜい1割程度ではないだろうか。

「鳥類生態学」黒田1966(注2.)には、鳥類の生態について広汎な解説や論文の紹介があり、その中には鳥の寿命や死亡率の記述もある。例えば北米のソングスパロウ(和名:ウタズズメ)の例が次のように紹介されている。

「北米のソングスパロウ(Johnston 1956)では、最初の卵数を100とすると、26%は孵化前に失われ、残り74個が雛となり、その30%が死に、残り52羽が巣立し、第1年度にその80%が死に、残りの10羽が繁殖した。次の年度には43%が死に、6羽が繁殖し、それ以後の成鳥死亡率も43%であった。かくて生き残るわずかなものが時に6~7年の寿命を保つのである。」

このように鳥の寿命について、私なりに考えてみたのであるが、まとめてみると、一方では5~10年も生きる小鳥がいるのに驚くとともに、他方、このように長く生きる個体は本当にごく稀なのだということが指摘できると思う。

鳥が1回で巣に卵を数個産み込み、種によっては1繁殖期にそれを繰り返すこともある。このようにするのは、それだけ繁殖の成功する割合が低いからであり、種の存続のために損失を補えるだけの余分を見積った行為だといえる。このことのさらに顕著なのが、さらに下等な動物たとえば多くの卵を産む魚などの例である。

厳しい環境の中で、長く生きることのできる野鳥は、ほんの限られた一部のものである。野鳥たちが自然の中で自分の力で生きているということを考えてみると、野鳥というものが何かよけいけなげで、いじらしい存在に思えてくる。すぐ人間を引合いに出したり、鳥と人間を比較するのはおかしいと思いつつも、人間は数少ない子どもたちでも無事に育てることが出来る存在なのだということを、歩き始めたわが家の子どもの顔を見ながら考えたりするのである。

(注1.)「鳥類観測ステーション報告」(財)山階鳥類研究所

(注2.)「鳥類生態学」黒田長久(株)出版科学総合研究所

〒004 札幌市豊平区月寒5条16丁目11番1号

朝日ハイツ1-201

## 珍鳥ニュース

井上 公雄

めずらしい鳥の写真を会員の田中金作さん、竹内強さんから寄せられましたので紹介致します。

何れも札幌市内又は、その近郊に於て撮影されたもので殆どが見過してしまいそうな場所で撮られたものです。何れの種類も本道での記録は少く、ツバメチドリは過去石狩、胆振、十勝、網走、根室等での観察が記録されて居ります。中国大陸北東部モンゴル帯を繁殖地とし、

日本の南西部でも繁殖の記録は有りますが、主として旅鳥として春秋に稀に立寄ったものが記録されて居ります。長く先の尖った翼とツバメの様に二股に分れた尾羽根を持ち体の割に足が短く全身が暗灰褐色の中型の鳥、成鳥ではオレンジ色を帯び、若鳥は灰色っぽい目の下から外は黒線内側は白線に縁どられた喉は、夏羽は黄オレンジ色、冬羽は目立たなくなる。若鳥ではこの辺りは不鮮明、



長い翼をゆっくりと羽ばたき飛翔と滑翔を繰り返しツバメの様に急旋回する軽快な飛翔の中に昆虫などを捉える。近年観察例が増える傾向にあり、最も新しい記録では、1987年5月下旬鶴川で7羽が観察されています。



62.4.27 ツバメチドリ 田中金作  
石狩町生振石狩川添い牧草地

タゲリは、後頭部の逆立った長い冠羽が特徴、緑色の光沢のある羽を持った大型のチドリ科の鳥で、ユーラシア大陸の温帯、亜寒帯で繁殖し中国大陸中南部で冬を過す。日本でも一部越冬する。本道での記録は、石狩、胆振、釧路地方での単独での少い記録が残っています。今年は4月中旬頃から下旬にかけて異個体が複数で観察されたと言う珍しい情報が寄せられました。北への渡りの途中旅鳥として見られたもので、幅の広い翼をふわふわと羽ばたき直飛する。腹面と翼の内側は白く風切羽は黒い。大きい川の合流点や浅い流れ、湿地帯、水田、畑地などで見られる。



62.4.2 タゲリ 田中金作  
東区雁来大橋上流付近において

セイタカシギは、細長い鮮やかな淡紅色の脚、頭上部、上面が灰黒色。下部が白のスマートなシギで大陸内陸部で繁殖。南半球に渡る日本はコースから外れているが稀な旅鳥で4月～5月と9月～11月の記録が多い。本道では胆振、空知、根室地方での記録はあるが、今年は4月末から5月中旬にかけて当別町、石狩町の石狩川流域で断続的に同一個体又は別個体複数で観察されたと言う珍しい記録になりました。掲載は白黒の写真になりましたが、タゲリ、セイタカシギは、実際に見ますとカラー写真では見られない大変美しいものです。

私達の周囲でもいつか思いがけない処で、思いがけない鳥に出合うかも知れません。身近な鳥とのふれあいを大切にそして又珍しい鳥との出会いの情報広く皆様に識って頂き度い事柄等ございましたら、是非お寄せ頂き度いと思います。



62.5.10 セイタカシギ 竹内 強  
石狩町八幡（石狩川）

#### 参考資料

日本産鳥類図鑑 東海大学出版会 1981 11版  
野鳥の図鑑 保育社 昭和61年10月版  
日本の野鳥 山と溪谷社 1985 9版  
フィールドガイド 日本の野鳥 日本野鳥の会 1984年4月版  
北の鳥たち 野生生物情報センター編 北海道生活環境部監修 昭和60年5月版  
実観察者談等を使用させて頂きました。

〒064 札幌市中央区南6条西11丁目 共済ハウス

# 昭和62年度 総会報告

と き 昭和62年4月18日(土) 午後2時～4時

ところ 札幌市民会館

小堀代表幹事の開会のこと及び菅野会長のあいさつ  
のあと、議長に谷口副会長を選出し、審議が行われ原案  
どおり可決された。

<議 事>

## 1. 昭和61年度事業報告

(総務)

(1) 野鳥写真展の開催 (於 札幌地下街ふれあい広場  
さっぽろ、三菱信託銀行札幌支店)

(2) 傷害保険の更新

(3) 新年懇談会の開催 (於 北海道婦人文化会館)

(4) 定例幹事会の開催 (毎月1回)

(5) 野鳥だよりの発送 (64～67号)

(探鳥)

探鳥会の開催 (17回、延べ510名)

(広報)

野鳥だよりの発行 (64～67号)

## 2. 昭和61年度会計報告

別表のとおり

## 3. 昭和61年度会計監査報告

大坊監事から適正に執行されている旨の報告があっ  
た。

## 4. 昭和62年度事業計画

(総務)

(1) 野鳥写真展の開催 (於 たくぎん本店地下自動サー  
ビスフロア、三菱信託銀行札幌支店)

(2) 傷害保険の更新

(3) 新年懇談会の開催

(4) 定例幹事会の開催

(5) 野鳥だよりの発送 (68～71号)

(6) 探鳥会記録の集合表作成

(探鳥)

探鳥会の開催 (16回)

(広報)

## 昭和61年度決算書

### ○ 収入の部

	決算額	予算額	摘 要
繰越金	190,655	190,655	
個人会費	554,000	630,000	370人
団体会費	25,500	22,500	4団体
寄付金	203,500	5,000	10万円2件
参加費	36,800	40,000	新年懇談会 藤の沢探鳥会
売上金	239,270	250,000	野鳥だより 絵葉書
雑収入	17,291	1,845	利息
計	1,267,016	1,140,000	
会費仮受分	89,000	0	
合計	1,356,016	1,140,000	

### ○ 支出の部

	決算額(A)	予算額(B)	摘 要
印刷費	366,400	420,000	野鳥だより
通信費	165,860	200,000	だより発送 探鳥会PR
会議費	90,866	110,000	総会・幹事会 新年懇談会
消耗品費	38,405	40,000	コピー代事務 用品
賃 金	13,350	20,000	だより発送 運搬代他
報 償 費	123,510	150,000	探鳥会手当 事務所謝礼他
雑 費	56,580	200,000	保険 写真展他
合 計	854,971	1,140,000	

### ○ 収支の部

(収入) (支出) (残高)  
1,356,016円 - 854,971円 = 501,045円

次年度へ繰越し

野鳥だよりの発行 (68~71号)

5. 昭和62年度予算

別表のとおり

6. 役員選出

役員を次のとおり選出した。

幹事であった片岡秀郎氏、三木昇氏、福岡研也氏、岩泉ゆう子氏、関口健一氏が退任された。

会 長 荻野寿衛吉

副 会 長 谷口一芳、柳沢信雄

監 事 野村梧郎、大坊幸七

代表幹事 小堀煌治

会計幹事 柳沢千代子

総務幹事 ○白澤昌彦、清水朋子、小堀煌治、柳沢千代子(兼務)、富川徹(兼務)、井上公雄(兼務)

探鳥幹事 ○井上公雄、戸津高保、竹内強、富川徹、中野高明、早瀬広司、小堀煌治、渡辺紀久雄、渡辺俊夫、堀内進

広報幹事 ○霜村耕一、武沢和義、道川富美子、村野紀雄、渡辺紀久雄(兼務)、白澤昌彦(兼務)

(○印は各担当の代表者)

## 昭和62年度予算書

### ○収入の部

	予算額	摘 要
繰越金	412,045	仮受金 89,000円は会費に計上
個人会費	570,000	1,500円×380人
団体会費	22,500	4,500円×5団体
寄付金	5,000	
参加費	40,000	新年懇談会 藤の沢探鳥会
売上金	250,000	野鳥だより 絵はがき他
雑収入	455	預金利息
合 計	1,300,000	

### ○支出の部

	予算額	摘 要
印刷費	350,000	野鳥だより 320,000 封筒他 30,000
通信費	200,000	だより発送 150,000 探鳥PR他 50,000
会議費	110,000	総会、幹事会 60,000 新年懇談会他 50,000
消耗品費	40,000	コピー事務用品
賃 金	20,000	だより発送
報 償 費	150,000	探鳥会手当 40,000 幹事会手当 40,000 事務所謝礼他 70,000
雑 費	430,000	保険、写真展 (予備費)
合 計	1,300,000	



## クマゲラを求めて(野幌)

62. 2. 15

宇井 晴穂

森のドラマーとしてその名が知られているクマゲラを一目見たい

と思っていたのでこの機会にと参加した。

幸いにして前日の吹雪が止み、時折陽光のさす、おだやかな観察日和になった。

大沢ローエゾユズリハー大沢一桂それぞれのコースの所どころに赤いテープがくられ番号ラベルのついている木があった。これらの木は倒れる心配がある危険木として伐採の対象になっているということである。

幹さえ樹皮を失い、素人目にも容易に枯死と判別できるものや、枝のみならず樹皮もしっかりして、まだ

勢いがあり、伐採されるには惜しい木も多くみられる。厳しい寒さに、じっと耐えつつ泰然として生きるこれらの木が人間の意思のままにその生を奪われていくことにやり切れない思いがする。木々で憩い、餌を取り、子を巣立ててきた多くの鳥類がいたであろう。

途中幾本かの小枝がかみ切られて雪面にこぼれ、剝離した樹皮が散乱していた。ややふくらみかけた冬芽もいくらかなくなっていた。野ウサギの食痕である。食事時仕種が目につかぶ。あちこちに見える足跡は早朝に人が出歩く前に餌を求めて歩いたものだろう。

大沢遊園地を過ぎて間もなく、急斜面に梢の朽ちかけた木があった。「フクロウの止まる木」ということであっ

た。テープは見えるが番号ラベルが見当たらないので膝まで没する雪をかき分け登る人、スキーで登る人、子ども達もラベルを見つけようと一生懸命になり、ようやくわかった。フクロウへの思いがみんなの心を揺り動かしているのであろう。

出発点であった大沢口駐車場が近づいてきたが待ち望んでいたクマガラの姿をついに見つけることはできなかった。しかしどこかで、人間達の動きをじっと見守っていたような気がする。

〒003 札幌市白石区平和通2丁目南6~34 802

## 探鳥会とヤマゲラ(野幌)

自然に恵まれた地に住みながら、もう少し野鳥の事を知る方がいいなと思い初めて参加しました。

うさぎの足跡をみて進行方向を教わり、樹木の伐採の問題についても触れる事ができました。眼前でキバシリが樹木をクルクルとまわりながら移動していくのがとても愛らしく、しばし足を止めていました。厳寒期なのか厚い毛皮を着ているようにも見えます。今日の森林公園にはいつもより野鳥が少ないように思えます。

先日珍しい事がありました。大塚駅迄歩いて行く途中の事、雪の中に若草色のネズミ様の物が落ちていました。近づくと嘴が半開きになり細長い舌がその間から垂

### 62. 2. 15 藤田 孝子

れているヤマゲラでした。失神でもしたのでしょうか？抱いても動かずそのまま懐の中へ。ジャンパーの下から力なく落ちるのでないかと手で押さえながら歩く事10分位そして胸の中でモゾモゾとしたかと思うとそのままパッと飛んで行きました。バスに乗る数十メートル手前での一瞬の事でした。「元気になって良かったなァ」と野鳥を抱いた珍らしさに自分に感心していました。それにしてももう少し目覚めるのが遅くバスの中で……と思うとゾツとしたり、もう少しじっくりと顔を拝んでおくのだったなと複雑な気持です。今度ヤマゲラを見た時には「あの時のヤマゲラだな」と勝手に思い込む事にしよう。

## 今日のかんそう(野幌)

ぼくは、今日、タンチョウ会に行きました。お母さんがあるくスキー、ぼくは、ミニスキーで行きました。と中、ミニスキーがおれました。ぼくは「またおれてしまった。」と、思いました。それからぼくはあるきました。そして、やっと大ききわ園地につきました。そして、あめと、お茶を食べたり、のんびりしました。帰り始めるとき、おれたから、長ぐつに、あるくスキーをつけようとおもい、さきをスキーのかなぐにつけました。そして、家までかえりました。

鳥はきばしりをみました。とてもおもしろかったです。

野幌森林公園 62. 2. 15 晴 9:30~12:50

### 62. 2. 15 藤田 昌志

〔記録された鳥〕トビ、ハイタカ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ツグミ、ハシブトガラ、ヒガラ、ゴジュウカラ、シジュウカラ、キバシリ、ウソ、カケス 以上14種

〔参加者〕柳沢信雄・千代子、富川徹、白澤昌彦、北村富子、大野信明、田中礼子、香川稔、戸津高保・以知子、三木昇、宇井晴穂、田辺至、道川弘・富美子、藤田孝子・昌志、葦沢さん家族4名、井上公雄 計22名

〔担当幹事〕富川徹 井上公雄

〒069 江別市文京台南町35-5

## 円山公園

### 62. 3. 1 白沢 光明(小2)

ぼくは、まる山へお父さんと妹とぼくと三人で車にのって、鳥を見に行きました。

ハシブトガラスとシメとヤマガラを見ました。

ヤマガラとシメは、木にとまっていた。

ぼくの家のベランダにもお父さんが作ったエサ台があ

ります。このエサ台にもヒヨドリとヤマガラとコゲラとアカゲラとゴジュウカラが来ています。

ヒヨドリはパンとカキを食べます。コゲラとアカゲラとヤマガラはあぶらみを食べます。ゴジュウカラとヤマガラがヒマワリのたねとクルミを食べてすぐはげて行き

ます。ヒヨドリがピーピーとなくのでうるさいと思いました。ぼくはコゲラがあぶらみをつついているのが一番かわいいので好きです。

円山公園 62. 3. 1 晴 10:00~12:00

〔記録された鳥〕トビ、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ツグミ、ハチジョウツグミ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、シメ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、ウシタカsp. 以上22種

〔参加者〕大浦美佐子、田中礼子、山崎カツエ、木田恵

美、山田甚一、山田れい子、渡辺栄子、玉井龍男、玉井繁美、大野信明、谷口一芳、谷口登志、松井昌、戸津高保、戸津以知子、大崎比良子、萩原やす子、佐々木武巳、本富礼子、香川稔、佐々木友子、野口正男、野口キヨ、古川豊子、こんのひろし、佐藤貢、井上公雄、霜村耕介、堀内進、曾根モト、杉田範男、杉田智恵子、武沢和義、舟橋定之、柳沢信雄、柳沢千代子、白澤昌彦、白澤光明、白澤真紀子、逸見 以上42名

〔担当幹事〕富川徹、竹内強

〒064 札幌市中央区南17条西18丁目

## 探鳥会に参加して(ウトナイ湖)

月に一度の学習会で隣席の友人から「今年は山の木の実が少ないのか庭の餌台に昨年迄来た事のないゴジュウカラが来て、飛び立つ前に必ず餌を一口に啜ってゆくの面白いですよ。」と話しかけられその他カケス、ヒガラ、アカゲラ等々の鳥の名前が出て来るのですが、今迄興味がなかった小鳥が農業気候等に関係している事を知らされ、一度バードウォッチングに連れて呉れる様お願いしたところ、「二十九日はウトナイ湖へと鳥の王様の鷺や純白のハクチョウ鴨等が肉眼でも見られる位迄寄って来るので行きましょう。」と誘われました。嬉しくて当日は一時間も早く起き8時30分出発胸をわくわくしてウトナイ湖へ。途中で今飛んでいる大きい鳥は青鷺、ミヤマカケスと教えて貰っているうちにウトナイ湖に到着。すぐ目の前に白鳥が人々の前に集っているのに驚きました。

オオハクチョウとコブ白鳥オナガガモが一番人に慣れているようでした。湖畔の冷い風には少々弱りましたが、可愛らしい白鳥達を見ていると寒さも忘れる程でした。

会員の方々は望遠鏡を据えて鳥をとらえオオワシが入っていると「嘴が黄色く肩が白いでしょう。ホホの白いホオジロガモ、アオサギ、ツルシギ、カモメ、オジロワシ」と本を開いて親切に教えて戴きました。それから湖畔を歩いてバードサンクチュアリへ途中での探鳥を楽しみ乍ら二階で皆さんと楽しく昼食を共にして階下へ降りて給餌台来てハシブトガラ、四十雀、五十雀アカゲラはフランスの水兵さんの様に赤いベレー帽をと少しづつ特徴をつかむ事も出来ました。今日見られた鳥は三十五種類と

62. 3. 29

出 淵 久 恵

の事。私の頭の中に残った鳥は、十種類程です。

何も解らない私に色々教えて下さった会員の方々の思いやりを巾の広い仲間にふれあえてとっても感謝しております。

ウトナイ湖 62. 3. 29 曇 10:00~13:00

〔記録された鳥〕アオサギ、マガン、ヒシクイ、コブハクチョウ、オオハクチョウ、マガモ、コガモ、ヨシガモ、ヒドリガモ、アメリカヒドリ、オナガガモ、ホオジロガモ、ミコアイサ、トビ、オジロワシ、オオワシ、キジ、ツルシギ、ヤマシギ、セグロカモメ、オオセグロカモメ、シロカモメ、カモメ、ヒバリ、ハクセキレイ、ハシブトガラ、ヒガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ベニマシコ、スズメ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス 以上35種

〔参加者〕井上公雄、大浦美佐子、大野信明、木田弘隆・美津江、小林稔・花枝・弘和・賢治、佐々木武巳、佐藤貢、関口健一、園部恭一、竹内強、武沢佐知子、田中金作・礼子、俵浩三、土田光子、出淵久恵、戸津高保・以知子、富川徹、浪田良三、難波茂雄、長谷川涼子、羽田恭子、福岡研也・玲子、星野義直・裕子・加奈・ゆみ、松井昌、道川弘・富美子、柳沢信雄・千代子、渡辺紀久雄 以上39名

〔担当幹事〕関口健一、渡辺紀久雄

北海道自然保護協会、北海道自然観察指導員連絡協議会との共催で行いました。

〒067 江別市上江別東町3-11

## 野幌森林公園

まだ残雪の森林の奥に続く白い小道を、野生の木々の香りを、胸パイ吸いながら、進んでいく。ふとここ大

62. 4. 19

加 藤 武 俊

沢口は、まえに野生のナメコ(うどんの汁の具にした。うまかったなあ)やイッポンシメジ(これは味噌汁にし

たけど、にがくて全部捨てたっけ)、マエタケを取りにつれて来てもらったが、あの時は、下ばかり見ていたせいか、鳥の姿はおぼえていない。そんな思いも「カケス」だ、「カケスよ」の声で消え、会の人の指さす方向を夢中でさがしていた。「いた」。「大きなあ」そして小枝から翔いた時、無性に感動し、満足感がみちた。2～3ヶ月までは、カラスとすずめ位しか、知らなかつもんなあ!それからは、オオアカゲラ、シジュウカラ、キクイタダキ、キレンジャクなど、会の人の双眼鏡を借り、図鑑で説明を受け、そのつど感激し、名前もつぎつぎと教えてもらい、忘れ、散会時には行くのを渋っていた子供達(小学5年と3年)も「俺専用の双眼鏡を買って」と言いだす仕末、でも少しは自然の良さが、わかってくれたかなあ?と思う。それにしても、親切に教えてくれた会の皆さん、有難う。妻と子ども、つぎに行く探鳥会を楽しみにしていますので、よろしく。

野幌森林公園 62. 4. 19 快晴 9:00～13:20

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、オオタカ、ハイタカ、ノスリ、オオジシギ、キジバト、アリスイ、ヤマゲラ、

アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒバリ、ヒヨドリ、モズ、アカモズ、キレンジャク、ミソサザイ、ツグミ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、ホオジロ、アオジ、カワラヒワ、ベニマシコ、ニュウナイスズメ、ムクドリ、カケス、ハシブトガラス、ハチクマ、ヒレンジャク 以上38種

〔参加者〕逸見康夫、鈴木加代、上村昌夫・則子、長井博、山賀芳子、大西喜代春、加藤武俊・美知子・甲人・久佳、高倉まり子、関谷絢子・ますみ、玉井龍男・繁美、長原友美、豊田年宏、渡辺かなこ、渡辺照彦、田辺至、岡田幹夫、福岡研也・玲子、園部恭一、大浦美佐子、大坊幸七、今野弘、田中礼子、清水朋子、野口正男、矢野昭二・玲子、羽田恭子、武沢佐知子、長谷川涼子、大野信明、佐々木武巳、戸津高保・以知子、村野紀雄、霜村耕介・耕一、柳沢信雄・千代子、難波茂雄、谷口登志、富川徹、井上公雄 以上49名

〔担当幹事〕富川徹、井上公雄

〒002 札幌市北区篠路町太平169-275

## 野幌森林公園

大沢口に到着して、かなり寒い降るのかなと空を見上げると、オオジシギが例の声と急降下の羽音で迎えてくれました。鳥とは思えないような声と尾羽の音、そしてはるばるオーストラリアから渡って来たという力強い飛び方に感激してしばらく見とれていましたと、今度はフワフワとアオサギが1羽横切って行きました。今回は探鳥会の様子を録音取材のため、高校の先生と生徒さんが加わり出発となりました。まずは高い梢にウソが、頬の赤いのが良く見えました。シメ・アトリと続いて、「アオジがいるよ」と声が、小走りに近づく、緑っぽい頭で良い声でさえずっています。マツの枝先に何かいる、大きいぞと思ったらエゾリスがしきりに何か食べていました。先頭のほうで何か見ている「何ですか」「ルリビタキ」場所を教えてもらって探すけれども、なかなか双眼鏡にはいらない、飛んでやっとなる。雌だけれどもきれい。笹藪の中の小川にヤブサメが、「ポカリスエットの缶の左奥」と教えてもらい、変なものが目印なので苦笑してしまふ。ヤブサメはめったに見られないと聞いていたので、またまた感激。松川の池付近の湿地帯で、ミズバショウの群生を見ていると、水面を飛ぶものがあります、「ミソサザイだったね」、「そうでしたか」と私何ともたよりない。大沢の池にはカイツブリが1羽、出たりもぐったりを繰り返していました。大沢園地で昼食

62. 4. 26

## 大浦美佐子

をとり、出発点に戻る途中でもルリビタキの雌雌が姿を現わしましたが、残念ながら私は見ることはできませんでした。しかし、最後の鳥合せの結果、今回はほとんど見ることができましたので、初心者にとっては、大満足の探鳥会でした。

野幌森林公園 62. 4. 26 曇 9:00～13:00

〔記録された鳥〕アオサギ、トビ、ノスリ、オオジシギ、キジバト、ヤマゲラ、アカゲラ、オオアカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、ミソサザイ、ルリビタキ、ヤブサメ、ウグイス、キクイタダキ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、ホオジロ、アオジ、アトリ、カワラヒワ、マヒワ、ウソ、シメ、ニュウナイスズメ、カケス、ハシブトガラス、ハシブトガラス、カイツブリ 以上35種

〔参加者〕今野弘、羽田恭子、佐藤典子、浪田良三、吉田宏昭、宮田久、矢野玲子、野口正男、戸津高保・以知子、香川稔、園部恭一、大浦美佐子、霜村耕介、長原友美、大野信明、佐々木武巳、柳谷賢治、坂本竜一、川原昌樹、井上公雄 以上21名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

〒005 札幌市南区真駒内緑町2丁目13-1-102

## 野幌森林公園

62. 5. 10

豊口 肇・美代子

去る4月27日拓銀本店の地下にカードで金をおろしに行きましたところ、丁度野鳥の写真展をやっておりました。前から鳥が好きでバードウォッチングの会がないかなと思っておりましたが、展示写真の前に「野鳥だより」が置いてあり、北海道野鳥愛護会のことを知りました。早速その足で西7丁目の広井ビルの事務所を訪ね夫婦で会員にさせて頂きました。

間もなく第67号会報と今年の予定表及び会員が撮られた珍しい野鳥のすばらしいカラー絵葉書を頂きました。予定表によれば次の探鳥会が5月10日となっており、バードウィークの始まりの日で、偶然最初の参加をすることが出来ました。

ところが集合場所の野幌森林公園大沢口駐車場がどこにあるのか、どうやって行くのかさっぱり判らず、事務所に聞いたところ井上さんに電話する様にとのことで、井上さんからくわしく伺って出かけました。

地下鉄で新札幌近くなり大分車内もすいて来たところ隣の車にいかにも探鳥会に行かれる様な方が居られました、改札口で全く初対面の井上さんと判りました。

さて皆様に挨拶も終り名札もつけていよいよバードウォッチングの始まりとなりましたが「あそこに何がいる」と教えられても新米の悲しき、いくら双眼鏡で探してもどこにいるやらさっぱり判りません。井上さんから遠慮なくのぞかせて貰いなさいと言われていましたので心臓強く三脚に望遠鏡を据付けた方々に見せて頂きましたが双眼鏡よりずっと狭い視野なのにピタリとつかまえられるには、さすがベテランとびっくりいたしました。

特にあと2・300米で集合地と云うところで見せて頂いた「おおるり」はかなり長い間同じ所にとまって、とても良い声ですつと鳴いてくれ、その色とともに一番印象に残りました。

最後の集合地でその日見た鳥の名を皆様であげられたら38種と云うことでこれ又びっくりでした。望遠鏡では大分見せて頂きましたが自分の双眼鏡で見たのは1ケタしかありませんでしたので。

はじめてでしたが同じ趣味を持っていると云うだけの関係の方々が和気藹々と一日をすごされることはすばらしい事と存じます。更に知識もふえ健康にもよいわけですから。今后もよろしく願い申し上げます。

野幌森林公園 62. 5. 10 曇り 9:00~13:20

〔記録された鳥〕アオサギ、オシドリ、マガモ、トビ、ハイタカ、オオジシギ、キジバト、カワセミ、ヤマゲラ、

アカゲラ、コゲラ、ヒヨドリ、クロツグミ、アカハラ、ツグミ、ヤブサメ、ウグイス、センダイムシクイ、キビタキ、オオルリ、エナガ、ハシブトガラ、ヒガラ、ヤマガラ、シジュウカラ、ゴジュウカラ、キバシリ、メジロ、アオジ、カワラヒワ、イカル、シメ、ニュウナイスズメ、コムドリ、カケス、ハシボソガラス、ハシブトガラス、カイツブリ 以上38種

〔参加者〕吉田裕二・優子、羽田恭子、今泉秀吉、玉井龍男・繁美、豊口肇・美代子、富川徹、岩泉ゆう子、谷口一芳・登志、霜村耕介、国本昌秀、田中金作・礼子、野口正男、今野弘、白沢昌彦・瑠美子・光明・真紀子、佐々木武巳、宮田久、松田昌、根岸工、柳沢信雄・千代子、田辺至、難波茂雄、道川弘・富美子、大野信明、大浦美佐子、矢野昭二・玲子、長原友美、中嶋慶子、川島幸子、高田雅之・早苗、岡田幹夫、戸津高保、大坊幸七、浪田良三、水崎満、井上公雄 以上47名

〔担当幹事〕戸津高保、井上公雄

〒005 札幌市南区澄川3条5丁目3-25





〔鶴川〕 昭和62年 8月30日  
(日)、9月13日(日)

秋の牧場にショウドウツバ  
メが舞い幼鳥や子育ての終っ  
た鳥たちの衣替えに戸迷い眼  
を疑うこともあります。

シベリヤや、北極圏で夏を越し、早くも越冬のため南  
へ向うシギチドリたちが、鶴川の川辺や河口の干潟で憩  
う姿を観察します。メダイチドリ、ダイゼン、ツルシギ、

〔野幌森林公園〕 昭和62年10月25日(日)

紅葉の名残りととどめる森林を落葉を踏みしめて歩き  
ます。南へ帰る鳥、北から来る鳥と渡り鳥の交替期で群  
れで行動することが多くなります。渡り鳥の初認終認に  
も味わいのあるのも此の頃です。秋特有の習性を識るの  
にも良い時季です。大沢口駐車場入口 午前9時

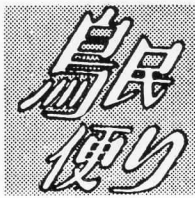
チュウシャクシギ等の他アジサシ、ユリカモメ等趣きの  
異ったウォッチングが楽し  
みです。

○JR日高本線鶴川駅前  
9時10分集合  
○行きのJRはありません。  
道南バス札幌駅前ターミナ  
ルそごうデパート1階8:  
00 発を利用して下さい。

— 帰りのJR —	
鶴川—苦小牧—札幌	
13:15~13:49	
14:26~15:53	
(特急)14:36~15:25	
14:30~15:03	
(急行)15:06~15:57	
15:48~17:11	

〔野幌森林公園を歩きましょう〕 昭和62年 9月20日

(日)10月4日(日) 大沢口駐車場入口 午前9時集合  
いづれの探鳥会も暴風雨でないかぎり行きます。昼食・  
筆記用具・観察用具・雨具等をご用意下さい。探鳥会の  
お問い合わせは011-551-6321 井上まで



鳥民だより

◇表彰のお知らせ

本会の元副会長、土屋文男  
さんが野生鳥獣保護功労者表  
彰(環境庁自然保護局長賞)を  
受けられました。おめでとう  
ございます。

比羅夫小廃校

当会の団体会員であった倶知安町立比羅夫小学校が62  
年3月をもって惜しくも廃校となりました。学校はなくな  
っても愛鳥の精神は受けつがれていくことでしょう。

野鳥写真展開催

野鳥写真展を次のとおり2回開催しました。出品者は  
19名で37点が寄せられ好評の中、無事終わりました。素晴  
らしい作品ばかりで、皆さんのこの一年間の活躍振りが  
うかがわれました。出品された作品を、野鳥だよりの69  
号と70号で御紹介します。来年も開催を予定してありま  
すので良い写真をたくさん撮られるよう期待してありま  
す。

- たくぎん自動サービスフロア(札幌市中央区大通西  
3丁目) 昭和62年4月20日~5月2日
- 三菱信託銀行札幌支店(札幌市中央区北4条西4丁  
目) 昭和62年5月6日~22日

〔出品者〕

小堀煌治(ウグイス、ツグミ)、佐々木武巳(アカゲ

ラ、探鳥会風景)、佐藤康雄(アカショウビン、カワ  
セミ) 佐藤幸典(アメリカコガモ、オシドリ)、高野  
秀樹(カケス) 竹内 強(ギンザンマシコ)、田中金  
作(ハイタカ)、富川 徹(コクガンとヒメウ、ギン  
ザンマシコ)、難波茂雄(オオハクチョウ、クマガラ)、  
島山佳幸(エナガ、オオワシ、ツルシギ)、林 大作  
(ヤマセミ)、福岡研也(ツクシガモ)、船造淳一  
(フクロウ、オジロワシ、シロハヤブサ)、見延誠一  
(カヌムリカイツブリ、ツルシギ)、柳沢千代子(ギ  
ンザンマシコ、クマガラ、クロガモ)、柳沢信夫(オ  
オマシコ、キレンジャク)、山田良造(アオバズク、  
シロハヤブサ、ショウドウツバメ)、若林信男(アオ  
アシシギ、イソシギ、キビタキ)

渡辺紀久雄(ノビタキ) 以上(広報部)



〔北海道野鳥愛護会〕年会費 1,500円 (会計年度4月より) 郵便振替 小樽 1 - 18287

☎060 札幌市中央区北1条西7丁目 広井ビル5階 北海道自然保護協会気付 ☎(011) 251-5465